

1. わかば台こども園の教育保育重点目標

『遊びきる子ども』  
～「またやりたい」明日につながる遊びの実践～

2. 本年度に定めた重点的に取り組む目標や計画を基に設定した園評価の具体的な評価項目及び観点

- ① 夢中になることを保障する環境づくり
- ② 子どもの思いや願いを汲み取る保育の展開
- ③ 園内研究を継続的に実施し、指導改善に生かす

3. 評価項目の達成状況及び取組状況

| 評価項目                               | 結果 | 理由   |
|------------------------------------|----|--|
| 1 【教育活動・指導】<br>夢中になることを保障する環境づくり   | B  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・環境構成を行う際に、子どもの発達や興味関心、要求に応じて遊びに必要な遊具や素材を整えたことや「好きなこと」「やりたいこと」が自ら選べることを意識して整えた。自ら選ぶことを大切にすることややりたいことを保障することで主体的活動を促すことが出来た。</li> <li>・子ども達が一日の活動を振り返ったり次の活動に見通しを持ったりできるよう、クラス内に話し合い（子ども・職員含む）を位置付けた。クラス内で子どもと共に活動を考え共有することで、ひとりの遊びを仲間との遊びにつなげたり、異なる環境や素材で試したり工夫したりすることが出来た。また、話し合いにより保育者が先を見据えた援助ができるようになることから、活動を楽しみにして登園する姿が多くなった。</li> <li>・継続して遊びを楽しめるよう意識して環境を整えること（続けたくなる・遊びの足跡を残す等）や継続的に遊びが展開できるよう（遊びのウイーク計画）を意図的に設けたことで、繰り返し遊びを楽しんだり、もっと遊びを楽しむために試したり工夫したりする姿が増えた。</li> <li>・子どもの思いに寄り添い、望んでいることに対してタイミング良く遊びの援助や配慮を行うことに対して、保育者が即興的、応用的に行うことや「どのように展開させるとよいか」という遊びの見通しを持って学びを促すことが出来るようスキルを高めていきたい。</li> </ul> |
| 2 【教育活動・指導】<br>子どもの思いや願いを汲み取る保育の展開 | B  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・3歳未満児クラスでは少人数の担当制により子どもの思いや考えに寄り添い、表情やしぐさ、喃語、指差しなど言葉にならない内面を読み取って、受容的、共感的、応答的な関りや言葉かけに努めた。子どもの欲求を満たすと共に受け止められる安心感から思いを伝える姿が多くなった。また、応答的な言葉のやり取りから発語を促すことが出来た。</li> <li>・3歳以上児クラスでは話し合いの機会を多く取り入れ、子どもの言葉を待ったり補ったりすることや仲立ちとなって意見を出し合うことを大切にした。自分の思いを伝えることや相手の思いを聞く経験が増え、考えを出し合って遊びを進めるなど伝え合う楽しさを味わうことが出来た。また、意見の対立から葛藤もあるが伝え合うことから、互いの思いを理解して折り合いをつけることも経験できた。</li> </ul>  |
| 3 【研修】<br>園内研究を継続的に実施し指導改善に生かす     | A  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・各リーダーのリーダーシップによりクラスやチーム、委員会など縦横のつながりを持ちながら、実践内容や方法について話し合いができ、研究テーマや重点目標に向けた具体的な取り組みに繋がった。少人数で話し合うことで意見が出しやすく内容も充実できた。</li> <li>・公開保育や実践事例を4つの視点で分析することで、日々の保育を振り返ることができ、指導の改善に生かすことが出来た。また、指導計画や記録をもとに、保育について子どもについて話し合う機会が増えた。</li> <li>・保育カンファレンスが多様な見方や考え方を知り、理解を深めたり新たな実践を生み出したりする場となっている。研修内容や方法を工夫しながら、子どもや保育について語り合う機会を多く取入れスキルアップを図りたい。</li> </ul>  |

4. 総合的な評価結果の概要

B

・「またやりたい」明日につながる遊びの実践を重点目標にして、①夢中になることを保障する環境づくり②子どもの思いや願いを汲み取る保育の展開をポイントに環境構成や保育者の援助について注力した。「自ら選ぶこと」や「やりたいことを保障すること」を意識することで子どもの主体的活動を促すことが出来た。また、遊びの振り返りや見通しが持てるように『話し合い』をクラスに位置付けたことや、遊びが継続して展開できるように意図的に『遊びのウイーク』を設けたことから、繰り返し楽しんだり、試したり工夫したりする姿や楽しみにして登園する姿が増えた。子どもの思いや願いを汲み取り、タイミングよく援助や配慮を行うことに対して、保育者が遊びの見通しをもつことや即興的、応用的に学びを促す援助を行うことが課題となった。研修に関して、保育カンファレンスが多様な見方や考え方を知り、理解を深めたり新たな実践を生み出したりする場となっている。内容や方法を工夫しながら、子どもや保育について語り合う機会を持ち、保育者のスキルアップを図っていきたい。